

アメリカの白いヨーロッパ 南部農本主義者のファシスト疑惑

越智博美

ローリーの父親で詩人のマークス・ロングはチャールズ・オルソンの友人でありまた弟子であり、毎年のようにアリゾナはフェニックス近郊のアセラデーロにあるロング邸で数日を過ごすことをならわしにしていた「……」だからローリーに詩の読み方を教えたのは師匠そのひとであったかもしれない「……」いずれにしても投影的でない詩は従来の韻律にしたがい、個人的で「閉じて」おり「……」詩人の喜びや悲しみを表すのに対して、投影的な詩はエズラ・パウンドやウィリアム・カロス・ウィリアムの作品が典型だが、「開かれて」いる「……」。「閉じた」詩はダン、ポー、ブラウニング、そしてアーチボルド・マクリーシュ。「開かれた」詩はパウンドやウィリアムズのもので「……」個人がおもてに出

てゐる。(Bolano 141-142)

二〇〇〇年、アメリカ南部の詩人で批評家でもあったアレックス・テイトの詳細な伝記が出版された。モダニズム研究者のスタン・スミスはその伝記について『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス』に掲載された書評を受け、書簡を宛て、一九二〇年代、テネシー州ナッシュヴィルのヴァンダービルト大学にいたテイトや仲間のジョン・クロウ・ランサムこそが、のちのエリオット、パウンドを中心とする「モダニズム」という用語を作り上げたということ、そしてそれが第二次大戦後にスタンダードになったことを指摘している。

考えてみれば、文学の「モダニズム」という語の意味がそも

そもこれほどの限定を受けてはいなかったことは、たとえばワ
ーナー・ソラーズの「エスニック・モダニズム」の議論を参考
にしてモダニズムをモダニティに対する反応ととらえるならば、
どのような人種やエスニシティの人々がどのような技法で書い
たのかによって多様であったことがわかる。しかし、モダニズ
ムがバウンドやエリオット、あるいはジョイスやフォークナー
を頂点にするスタイルであると限定的に考えることが当然視さ
れるのが戦後のことであり、そしてその源流にテイトラの存在
があるということはどのように考えればよいのだろうか。

限定的な意味でのハイモダニズムが戦中から戦後に産出され
る過程において、ロバート・ペン・ウォレンの「敗北して初め
て堅固な南部が生まれた」(Legacy, 14-15) という言葉や、テ
イトの「現在の中にある過去を意識する文学」(“New Provin-
cialism,” 545) という言葉にもあきらかなように、彼らは強烈
な歴史意識を前量化しつつ南部文学の研究制度を立ちあげたが、
一方で新批評という歴史や現実を捨象した批評でも知られてい
る。南部文学という一見して歴史に彩られているようにみえる
その文学と非歴史的で非政治的な新批評は、彼らの文化観と密
接に結びついて制度化されたものであるが、この非政治的な新
批評が第二次世界大戦をにらみながら練り上げられた極めて政
治的なものであり、そのなかで批評としてキャンノン化したこと、

さらに言えば新批評家としての彼らが冷戦知識人でもあったこ
とについてはあまり語られてこなかったかもしれない。という
のも、おそらく冷戦知識人といったときに即座に思い浮かぶの
は、アーサー・シュレジンジャー Jr. やライオネル・トリリング
といった左翼から党派色を抜き去った文化左翼としてのリベラ
ル知識人たちだからであろう。

のちにジェイムソンが『シンギュラー・モダニティ』で触れ
ることになる(228)スタン・スミスのこの手紙は、源流に触
れつつも「なぜそうなるのか」については言及していない。本
稿では、アメリカの南部で一九二〇年代に『フュージティヴ』
というモダニズム詩の雑誌を立ちあげ、その後一九三〇年代前
半に農本主義という政治運動をおこないつつも、その政治運動
を棄てていわゆる新批評家となる人達、とりわけアレン・テイ
ト、ロバート・ペン・ウォレンの言論が三〇年代以降にたどっ
た道筋を検証することを通して、彼らの「農本主義」を再度位
置づけて、「なぜ」にいたるステップのひとつを検証してみたい。
この過程を考えることはおそらく戦後研究対象をも規定して
きた新批評がいかに冷戦期の知的言説と共振していたか、そ
れどころか冷戦イデオロギーそのものであったのか、そしてそ
のような新批評がそもそもいかに南部農本主義者の南部ナシヨ
ナリズムに裏打ちされていたかという系譜を考えることにつな

がるだろう。そのことはまた自明視されるモダニズム、および自分の足元でいえば戦後の英文学研究をも規定してきたキャンを歴史化して考え直す契機にもなるかもしれない。

その際に考えてみたいのが冒頭の引用の醸し出すイメージである。一九二〇年代、テネシー州のナッシュヴィルにあるヴァンダービルト大学には、いわゆるローズ奨学金を取得してイングラントで学んだ秀才たちが群をなしていた。ジョン・クロウ・ランサムとその若き弟子たち（寮で同室だったテイトとウォレン、あるいはドナルド・デイヴィッドソン、アンドリュース・ライトルなど）がランサムの家に招かれ、あるいはアラバマのライトルの父の牧場に集い、「兄弟 (brethren)」と自称する結束の強さを誇っていた (Murphy 11-13)。

彼らが英詩を礼賛し、またT・S・エリオットの詩を持ちあげて『フュージティヴ』というモダニズム詩雑誌を出したことはよく知られている。くだんの引用は集まっているメンバーの名前さえ変えてしまえば、さながら彼らの文学観とその緊密な関係を思わせるものだが、実はこれは、アメリカにおける極右文学者の辞典という体裁をとったロベルト・ボラーニョによるフィクション『南北アメリカにおけるナチス文学』(一九九六)からの一節である。ボラーニョはモデルが誰かを明かしてはいないが、チリの作家のこの想像上の極右作家たちのあきらかに

新批評的な詩論と師弟の姿にフュージティヴ詩人を想像しないことは難しい。仮にこのモデルがランサムやウォレン、あるいはテイトではないとしても、新批評的な詩論が「ナチス文学」であるとは、実際に彼らがファシスト、時にナチスと称されたことを思い出すと見過ごしにできない意味を持つのではないかと思われる。実際のところ、のちに彼らが政治を棄てて新批評家になる過程には脱ファシストのイメージを言説上作っていかうとする試みがあつたのだとすればなおさらである。フュージティヴ詩人が農本主義者となったときにファシスト、時によってナチスと称されることになったのはどのような部分においてなのだろうか。

1 農本主義の白い想像力

『フュージティヴ』がモダニズム詩を称揚していた二〇年代の南部は、社会問題が集約されたような行き暮れた地域とされていた。ペラグラやラ十二指腸虫の寄生、いわゆるブア・ホワイの問題など、それは新たに台頭した進歩的な社会学の調査の対象、したがって改革の対象にもなった。(Tindall) 進化論教育の是非をめぐる一九二五年のスコップス裁判は、南部の後進性を象徴するできごととなり、南部は非科学的な遅れた場所

との印象をいっそう強めることになり、最終的に大恐慌時代にはアメリカの「第一の経済問題」(Carlton and Cocharis 42) になってしまふ。

しかしながら、このように立ち後れるのはなにより産業主義のせいであるとしたフュージティヴの詩人たちは、一九三〇年に『私の立場 (Till Take My Stand)』という農本主義のマニフェスト本を出すことになる。この本は、ひとつには北部が象徴する産業主義と消費主義に対するアンチテーゼであり、同時に進歩的な社会学者が象徴するリベラリズムやコミニズムに対するアンチテーゼでもあり、しかも当初は『反共産主義論集』(Gray 127) というタイトルで構想されていた。だから結果として農本主義を産業主義に対するアンチとして掲げると言うとき、それは大変に反動的な色を帯びていることになる。とはいえ、そもそも『フュージティヴ』ですでに「旧南部の上流」(Vol 1 "Foreword") の「お上品な伝統」から逃げ、また「わかりやすく」詩ではなく知力を必要とする「英詩の伝統」(Ransom, "Mixed Modes" 28) に向かうのだとしていた彼らにとっては、産業化の行き着く末がコミニズムであり、むしろ遅れていると言われる南部こそが、そうした行き着く先を回避する手立てを幸いにも持っているという南部擁護が『私の立場』だと言える。

産業化と都会化が進んだ北部と、後れた田舎の南部。南部を北部との対比で語ることが一九二〇年代の特徴でもあるが、それは文化を語る際にも持ち込まれ、H・L・メンケンによる辛辣なエッセイ「文化のサハラ砂漠」(一九二〇) などはその図式の典型である。しかし、農本主義者は「後れている」ことを逆手に取り、その前産業化社会を過去のイングランドに接続していく。この時の農本主義コミュニティのイメージはひとことではいえず、産業革命以前のイングランド文化を源泉とする、白人エリートからなる農業立国である。

ランサムが書いたとされる(Hobson 212) イントロダクションでは、同時代の南部の産業化を憂える立場が明瞭に示されている。産業化が進み、機械生産が増大したからといって決して「余暇 (leisure)」(xi) が増えないことが問題で、人々との適切な関係が作れないそうした社会では「作法、会話、款待の精神、共感、家族、恋愛」(xiii) をまともに営めなくなるばかりか、芸術も育たなくなる。なぜなら「宗教と同様に、芸術はおしなべて自然への正しい態度」を基盤とし、とりわけ自然に対する「自由かつ無私の観察」が必要であって、それには「余暇」が必須であるからだ(xiii)。このような生活は産業化社会ではなくて農本主義が可能にするものである。農本主義のもとでは、労働は「知性と余暇」をもって追求され、なお

かつ労働者も最大の数携わらせることができる (XIV)。イン
トログクションで注目すべきは、当時の進歩主義やコミュニズ
ムを産業化と結びつけて批判しつつ農本主義という経済体制を
主張することが文芸と直結していくことである。彼らの芸術へ
の「無私の」態度にはすでに、大衆美学の対極にあるものとし
ての (プルデュール 166) 新批評に結びつくエリート階級の態
度を見てとることが可能である。そして、労働にたまさか触れ
てはいるものの、農本主義が「余暇」と結びつき、しかも「無
私」の距離を対象と取れるという限り、その農本主義は有閑階
級の、むしろ労働なき農本主義と呼べるものである。

その農本主義の「余暇」に満ちた社会のモデルは広く言えば
ヨーロッパ、狭く言うならイングランドである。ただし、その
イングランドもどのような時代のイングランドなのかは定か
ではない。『私の立場』に寄せたランサムのエッセイによれば南
部は「ヨーロッパの文化の原則にしたがった文化を創りあげ、
守っている」(3) 点でアメリカでも特異な存在であり、しかも
イングランドの文化がそのモデル (3) である。それこそが
「純然たるヨーロッパ主義」であり、「自足し、後ろ向きで、地
方主義の色濃いコミュニティ」(3) である。アメリカであれば
それは「ヨーロッパの上流」(13) をモデルにした旧南部にそ
のイメージが求められている。農本主義を「過去」に遡って求

めるのはランサムだけではない。アレン・テイトもまたヨーロ
ッパの過去、しかも中世にまで遡る。それによれば旧南部が南
北戦争で敗れた原因はプロテスタンティズムであるとし、「封
建的宗教」を欠いたからこそ「封建的社会」を維持しきれなか
ったという立場を取る (166)。テイトのこのような立場は一貫
しており、すでに『ジェファソン・デイヴィス伝』(一九二九)
において南北戦争を、南部の「後ろ向き」(……) で自然の征服
を最低限 (301) とするヨーロッパ性を守る戦いであったと位
置づけている。「南部における著述業」(一九三五) というエッ
セイにおいても同様であり、南部作家のヨーロッパ的な南部の
独自の歴史意識 (165, 175) を称揚している。おそらくここで
大切なことは、そのような「余暇」に溢れる社会こそが文化を
支えるというエリート主義であろう。他にもスターク・ヤング
やジョン・グールド・フレッチャーは教育を扱い、同様の立場
を取っている。彼らの政治的議論は、文化の議論と表裏一体な
のである。そして、その「余暇」は誰が支えるのか。マルクス
主義を嫌い、したがって階級を語ることはない彼らの議論には、
不思議なほど労働の影がない。

おそらくロバート・ベン・ウォレンのみが、そのなかでア
メリカ系アメリカ人の問題を正面から扱っている点において注目
できる。そのためにドナルド・デイヴィッドソンはウォレンの

エッセイを『私の立場』に収録することに反対したほどであった (Singal 348-349)。とはいえ、ウォレンはそもそも南部の大義をめぐる保守主義から出発していることを確認したい。『わたしの立場』の前年に出した『ジョン・ブラウン伝 (John Brown)』(一九二九)は、ローズ奨学金でオックスフォードに滞在中に書き上げた、ウォレンの最初の本である。ブラウンは奴隸制反対の活動家で、ヴァージニア州のハーパーズ・フェリーで連邦の弾薬庫を襲って捕まり処刑された英雄的人物だが、副題「殉教者の創造 (The Making of a Martyr)」にも示されるとおり、この本はエマソンやソーローまでも味方につけたブラウンの殉教者としての位置が「つくられた」ものであることをあばく脱神話化の作業だった。エマソンらが「殉教者」(431) 扱いすることによって殉教者ジョン・ブラウンは創られていくのである。ちょうどデイトが同じ年に出した『ジェファソン・デイヴィス伝』において、女性化され擲擲されていた南部連合大統領のデイヴィスの像を男らしい人物として南部側に奪回し、なおかつ南北戦争を「後ろ向き」な「ヨーロッパ文明最後の砦」(301) たる南部と産業主義の戦争として捉え返したことに同じように、伝記を扱いつつ、その意味をラディカルに変容させる解釈を持ち出すウォレンがこの本において「南部の大義」を護る側にいることはあきらかである。

そのような彼が『わたしの立場』に寄せた文章はジョエル・チャンドラー・ハリスのリーマスじいやシリーズに登場する「うさぎどん」の住処を連想させる「いばらの茂み」というエッセイである。ウォレンは正面から黒人の問題に取り組もうとする。南部がいま産業化に直面している事実を認めたうえで、人種差別の解消に穏やかに取り組もうとしたブッカー・T・ワシントンを評価しながら、人種の分離を時代に合わせてやり直すことを提案した。とはいえ、黒人にとって南部の人種分離政策はむしろ恩恵だとする温情主義的な態度は、たとえば黒人が突如移住したシカゴではむしろ黒人は苦しんでいるという指摘や、人種統合を求める共産主義者への批判、あるいはまた彼らが南部では農業でそれなりに地位を得ているところから伺える (262, 254, 262)。グレイス・エリザベス・ヘイルが述べるように、むしろこの時期の黒人の中には、ウォレンの記述と真逆の過酷な農業生活をする人も多い一方で、都市部では中流の黒人も増加して消費主義を礼賛していたのだが (Hale 138-140)、そのような姿はウォレンの人種分離されたパストラルなイメージからは排除され、静止画像のような遠景としてしか出てくることはない。彼が描く貧しい南部には、「小屋の前に腰を降ろし、あるいは綿花に腰をかがめ、丘陵地のタバコ畑に身をかがめ、あるいは夏の宵には街の通りに繰り出してい

る」(26) 黒人たちの姿があるのみだ。ヘイルは当時のツーリスト向けの写真でロマンティサイズされた黒人農民などが「ひとつの南部的光景」として消費され、さながら無料のミンストレルショーだったと指摘しているが(44-47)、ウォレンの黒人はまさしくこのようなものとしてフェティッシュ化されて封じ込められている。しかもウォレンは、ヘイルの指摘する現実——農業に収まらない黒人が産業主義の恩恵としての消費主義を喜び、ラディカルな黒人が人種分離政策の廃止を迫っていること——を認めて当時の共産主義とアフリカ系アメリカ人との結びつきを認識しながらも、人種分離政策の廃止はまだ時期尚早という立場を取る。黒人解放をコミニストと結びつけて反対を唱えるのである。後年、人種の問題に何度も立ち戻るウォレンだが、少なくともこの段階で大切だったのは人種分離政策撤廃ではなく、人種分離の図式のなかでカラーラインを効果的に引き直して黒人たちに彼らの住処「いばらの茂み」を、すなわち「適切な場所」(263)を与えることだった。

農本主義者は反産業主義を唱えるが、テイトのように封建社会をイメージでき、ランサムのように「余暇」を農業と結びつけられるのは、人種分離された南部にいて、黒人を「写真」のようにしか観ることのない感受性に助けられてもいるからだろう。白人というだけで経済的に一歩上にいられる環境、あるい

はウォレンがいみじくも指摘したように共産主義と手を結ぶためには労働を担うのは黒人(および現実的には貧乏白人も)であることが暗黙裏に了解されている環境では、階級差が人種の差になっており、「有閑」の農本主義者の目には絵はがき以上になることはない。農本主義とは人種分離のために見えなくなった黒人と貧しい白人労働者を隠蔽しながらイメージされた白い社会とも言えるだろう。

2 「地方主義」対「文化」

『わたしの立場』は当初、一九三〇年代に勢いのあった数々の地方主義(regionalism)のひとつという位置づけだった。ここからんだテイト、ランサム、ウォレンが一九四〇年代のはじめには農本主義の政治をすっかり棄てて新批評の批評家として文学のみに関わるようになるには、この地方主義がニューディール期から第二次大戦期に至るまでに、アメリカとは何かというナショナルなイメージとのあいだの交渉のなかでいったんは称揚されたのに足場を失う過程とおおいに関係がある。彼らは三〇年代にすでに、I・A・リチャーズの理論を取り入れつつ、後年新批評と呼ばれることになるような批評の方法や詩観を育てている。三〇年代半ばには「詩のスタンザそれ自体が

真実あるいは虚偽というのではなく、存在するものである」(Tate, "Three Types" 192) という存在論的な詩観をコミュニティの批評家と対立しつつ練り上げる一方で、一九三六年の第二マニフェストと言える『誰がアメリカを所有するのか (Who Owns America?)』まではとりわけ中央集権化に対抗して「脱中央集権化」を唱え、反ニューディール、反共産主義の政治的発言を行っていた。

ロバート・L・ドーマンは、地方主義がニューディールの押し進めるある種の中央集権化の勢いに勝てなかったということを示唆している。土地と結びついた「個」を尊重していた農本主義はその勢いに負けたということもあるが、おそらくもうひとつ、彼らの語彙がニューディールの語彙と言説に対応しきれなかったこともあるだろう。一二人の農本主義者のなかでも、もっとも頑固な地方主義の立場をとったドナルド・デイヴィッドソンは編集者W・T・クーチへの手紙(一九三九年五月七日付)において「統計表、社会学や経済学」がそのような「抽象的な暗号の裏にいる民衆」を捉えることができないと嘆いたが(Dorman 278) この統計表や社会学といったものはたんに一九二〇年代に力を得てきた社会学という以上に、三〇年代に国じゅうを覆う力となっていたもの——マイケル・ザレイが「ニューディール・モダニズム」と呼ぶ社会保険と統計の言説

(13-17) であった。デイヴィッドソンの嘆きは、一九三〇年代末期には、このような言語の前で「個」の言葉が力を失う過程を語っていると言える。統計の言葉とのせめぎ合いについては、ウォレンが『誰がアメリカを所有するのか』に寄せた論考において「文学の地方主義」と「経済学学者、編集者、社会学者、政治家」が語る地方主義的プロジェクトのあいだには関係がないとして(357)文学の自律を主張するときも同様である。テキストにしても、はやくも一九三五年のエッセイ「詩の三つのタイプ」において、科学的に事象を説明する意志や「実践的な知」(191)、あるいはマルクス主義批評のように経済基盤と文学を直結させることに苛立ち(187)、それに対して詩の言葉の「超然(aloud)」(177)を唱えている。詩のスタンザはそれ自体が「真であるとか偽であるということはない。それはそこに存在する」「創造された客体」(192, 194)であるとするその言葉使いからすれば、後年新批評と言われる詩の存在論はすでにかたちを取っている。とはいえ、彼らの言明がのちの冷戦期とちがって非政治性の政治性という力を持ち得なかったのは、ニューディール期の覇権的な言説に対抗させる限り、詩の自律も地方主義に付随するものでしかなく、むしろ世界をトータルに数値化する意志を持つ言説の前には、政治的な力を持つことが、かなわなかったであろう。

さらにもうひとつ、ヨーロッパで勃発した第二次世界大戦へのアメリカの対応の中で、地方主義がファシズムとの関係においてその意味づけの変化を余儀なくされたという過程もある。

農本主義者のランサム、テイト、ウォレンらがラディカルに政治の言葉を消していく過程には、とりわけこのアメリカの外交政策の過程を考慮に入れなければならないのではないだろうか。セルジュ・ギルボーは一九四一年から四三年のあいだにアメリカが戦争にむけてナシヨナリズムとインターナシヨナリズムを同時に前面に押し出したことを指摘している。とりわけ三九年の独ソ不可侵条約、四〇年のパリ陥落に至っては、ファシズムの脅威を対岸の火事として見過ごすことができなくなっていた。世界をリードするために国際主義は重要だが、そのためには一見矛盾するように見えるかもしれないが、国内がナシヨナリスティックに「一枚岩的に」規定される必要がある。この流れのなかで一枚岩のアメリカは、多様な人種や地方よりは「共通のアメリカ文化」から語られるようになる (Gilbault 59)。

ロバート・H・プリンクメイヤー Jr. は、このファシズムの脅威の前に、アメリカを「文化」から規定する動きがおこり、農本主義を含めた地方主義が力を失った過程を説明している。それによればファシズムとアメリカという彼我の二項対立は「民主主義対ファシズム」という図式を呼び込み、そのなかで民主

主義は「普遍的な権利と原理」であり「人種と国民に関する非合理的な偏見」がないもの、対するファシズムはこのような偏見を表明し、普遍を追い立てて個を目指すとした (12)。ファシズムとは「人種、ネイション、階級」と引き替えに「普遍の真実、価値、法、人権」を拒むものと位置づけられたのである (13)。

アメリカを「人種、ネイション、階級」のどれかと特定して結びつけない語り方のキーワードは「文化」の「特徴の構造」 (Brinkmeyer 9) になった。プリンクメイヤーがその代表として挙げるのは日本の文化を語ったルース・ベネディクトとともに政府に雇われたマーガレット・ミードの『火薬をしめらせるな』 (一九四二) である。ミードはここで民主主義を「文化全体に通底するふるまいのタイプであり、心的姿勢」 (20) としている。ブルデューのハビトゥス概念のごとく、その姿勢は「公職の候補、路面電車、学校、新聞」にも浸透する。しかもそれを突如民主主義ではない国家に植え付けることもできないのは、「近代アメリカ社会に封建制を導入」できないのと同じことである (20)。

「文化全体」という考え方からすれば地方の個性性へと向かう地方主義をファシズムと結びつける発想も出るのかもしれないが、ただしここにも国際情勢が絡んでいる。この時期地方主

義の流れのひとつは、ニューディール政策のひとつWPA (Works Progress Administration) で推進されたものであり、たとえば州や河川を取り上げた『アメリカン・ガイド』シリーズもその地方見直しプロジェクトの成果である (Szalay 61-62)。ここには人民戦線系のアーティストが多く関わっていた。共産主義と連動する人民戦線は当初対ファシズムの有効な形式とされ、左翼系知識人が多数賛同していたが、三六年のモスクワ裁判、その後三九年の独ソ不可侵条約に至り、ついにはアメリカが参戦する事態になると、あきらかにアメリカとして容認できる立場ではなくなっていく。アメリカが国家の政策として孤立主義を棄てて国際主義を取り始めたとき、左翼系アーティストがらみの地方主義もまた孤立主義と同一視され、また、フォークロアやブリミティヴィズムも含めてフォークアートを好む地方主義は、モダニズムを退廃として退けたナチスと並べて批判されることになる。この文脈のちのち文学のモダニズムのキャノン化と並行していた抽象表現主義のキャノン化を用意したことは注意に値するが (Gilbaut 49-99)、農本主義の文学のモダニズムはむしろ「地方」の「復古主義」としてファシズムと同一視されていく。

3 農本主義者のファシスト疑惑

このような文脈のなかで南部の農本主義者も地方主義者として「非合理的なファシスト」と結びつけられ、そのことに苦しみことになる。そもそも、農本主義のイメージは、先にも述べたようにエリート白人文化のコミュニティである。大恐慌時代を活写して有名なマーガレット・バーク・ホワイトの代表作のひとつに、洪水の被災者のアフリカ系アメリカ人が列をなしているその頭上に白人の裕福な家族が消費生活を楽しんでいる「ルイヴィル洪水に際して」という写真があるが、農本主義の社会とは、まるでその白人家族を「有閑の白人男性たち」に換えたようなものと言えるだろう。当時のアメリカの生活、とりわけ南部の生活において視界から消せない存在のアフリカ系アメリカ人を消し去ったうえで、消費生活を否定する有閑の白人の社会が、農本主義であるとも言えるのだ。したがって当初の批判が「小さな特権的アップークラス」の人々の古い南部をイメージしつつ都合よく「奴隷制」を忘れた「タイプライター農本主義」であって (Hazlett 48-49)、実効性なきものだということとはたしかにその通りである。しかしながら、アメリカが対ファシズムの姿勢を強めていくなかで、農本主義者たちは反ニューディールとしての地方主義の言葉の力を失うばかりかファ

シストと同一視されていた。人民戦線系の左翼作家たちがこぞってファシズムと対抗しようとしているときにその左翼を敵対視していたという力関係がひとつと、地方主義がファシズムと結びつけられる文脈が出てきたときに南部の後進性そのものが農本主義と結びつき、それがさらにファシズムと結びつけられるという事態が起こったことが大きな要因である。

ブリンクメイヤーは『四番目の幽霊』（二〇〇九）のなかで（リアン・スミスの自伝的な著書『キラーズ・オヴ・ザ・ドリム』で南部人が抑圧する三つの幽霊、すなわちセックスの対象としての黒人女性、その結果としての親に拒絶された子ども、そして子どものときに世話になりつつも後に愛情の価値無しとして拒絶の対象となる黒人乳母について述べていることを受けている）南部人がファシズムを第四のゴーストとして悪魔払いしなければならなかった過程を農本主義者、ウィリアム・アレクサンダー・パーシーその他南部作家について書いている。ただし、農本主義者がファシズムの誹りをいかに免れようとしたかについては分析対象なのだが、彼らのゴースト払いの所作と新批評、さらには冷戦を繋げるところまではその手を伸ばさない。しかしブリンクメイヤーが繋げなかったこの部分がおそらく農本主義者が農本主義を棄てることと、新批評が冷戦期にキャンノン化したこととのミッシングリンクを形作っているのだ

はないだろうか。

ブリンクメイヤーによれば、当時ファシズムは不合理な野蛮なものとされていたが、南部の後進性もまた同様に形容されたアメリカが「普遍的な権利と合理性」を基軸に発展してきた国であるとすれば、一九二〇年代以降の行き暮れた南部は啓蒙から滑り落ちた場所であった。その後進性をブリンクメイヤーは同時代のカール・カマーがアラバマについて書いた著書から例証してみせる。カマーの目に映る一九三〇年代半ばのアラバマは、当時のアメリカの中であって多様な一地方ではなく、むしろ「コンゴ」のごとく「別の国である州」であり、また一糸乱れぬKKKの行進の描写はのちのファシズムが醸し出す「専制政治」のイメージそのものである（Brinkmeyer 67）。一九三〇年代後半になって、ナチスの人種差別が前景化されてくると、南部の人種差別がナチス同様の「非合理的な野蛮」となっていく（Brinkmeyer 67）。また、南部ではポピュリズムが幅をきかせており、それもまた「独裁」のイメージを当てはめられていた。後年ウォレンが発表してピューリッツァー賞を受ける『すべて王の民』（一九四六）の主要登場人物のひとりウィリー・スタークのモデルとも言われ、カリスマ的人気を誇っていたルイジアナの政治家ヒューイ・ロングは、しばしばリベラル派のジャーナリストからその他のポピュリスト政治家

とならんで、独裁者として称されたのみならず「ロング總統 (Fuhrer Long)」とまで呼ばれ、ヒトラーとの類似性を恐れられてもいたことをプリンクメイヤーは指摘している (8)。

南部の人種差別をナチスと並べて批判したのはリベラルなジャーナリストたちばかりではなかった。黒人活動家たちにとって、当時の人種問題は帝国主義とコロニアリズム問題であり、実際、彼らは三〇年代以降、しばしばひとつの階級として共産主義と手を結んで人種差別の解決を目指していた (Eghean)。

そのことが南部をさらにアメリカにおける別種の場合として扱うことにつながっていく。ヒトラーがアメリカの人種差別を素晴らしいと言っていたことからしても (Grill and Jenkins) 南部とファシストの結びつきはたまたま少数の人間がそう思ったというものではなかった。ゲリルとジェンキンスは南部とナチス・ドイツをバラレルにとらえる想像力のひとつとして、一九四〇年代の黒人活動家がアラバマの差別を「ヒトラー化されたアメリカ (Hitlerized USA)」(692) と語っていたことを紹介している。南部社会がもちろんみずからをファシストと同一視していたわけではないとしても、南部はその人種差別や後進性において潜在的にファシストとの親和性を持つ土地としてイメージされていたのである。人種差別の外国という扱いは、たとえばリチャード・ライトの『ブラック・ボーイ』が編集の段階

で前半部分だけで出版された結果として、北部に自由のアメリカというイメージが付け加えられたことも、この文脈の一例であるとプリンクメイヤーは指摘している (19-21)。

こうなったとき、南部はアメリカですらなくなっていくだろう。事実、ミードは『火薬を湿らせるな』において、民主主義を信奉する文化としてアメリカを規定する際の例外として南部を位置づけるに至っている。ミードは脚注においてアメリカの文化を語るといながらも南部が人種のカーリストを基盤にした社会である以上は、みずからの著作の「一般化の議論」は「北部と中西部と西部」に基づいたものであり、南部が「異なる文化」の場として例外であると位置づける (32)。アメリカを文化として一枚岩的に語る前提と齟齬をきたす南部は、そもそもアメリカからは除外されていたのである。

一九三〇年の農本主義のマニフェストは三〇年代半ばにこうした批判を避及的に呼び込むことになった。そのきっかけはテイトラが一九三〇年代の半ばにかけて、農本主義の発言をししばしば掲載していた『アメリカン・レヴュー』の編集者、シュワード・コリンズが、南部出身の左翼作家グレイス・ランブキンが反ファシズム雑誌に掲載するためにおこなったインタビューを受けて、みずからのファシズムに寄せる共感を語ったことである (Underwood 239-251, Brinkmeyer 38-43)。ランブキ

ンは農本主義者をコリンズとともにナチスと並べて評し、テイトはそれに対して反論を繰り広げるが、一九三六年の時点で共產主義を批判しながらの反論は、ますますってファシズムとのレッテルを呼び込むばかりであった。というのも、ランブキンはテイトが『私の立場』に寄せた議論において、「封建的な宗教」なき南部が伝統を守るには「暴力」しかない(Tate 174)と述べたことを指して、彼がすでにファシストを胚胎していたことを指摘して反論したのである(Lumpkin 76)。一九三六年の段階では、反近代主義としての農本主義者のモダニズム詩は、ランブキンの近代主義^{モダニズム}の前に力を持ち得なかった。

人種差別をファシズムと考えるならば、たしかに『わたしの立場』にその影を見つけることは可能である。たとえばスターク・ヤングは南部の文化をアングロ・サクソンのものと位置づけ(341)、ランサムもまた旧南部の奴隷制を擁護すると取れることを書き(14)、ウォレンもまた人種分離の南部の秩序は、白人にも黒人にも「満足のいく関係」(363)であると述べているからには、彼らは人種差別を隠し持っており、その意味ではファシズムのレッテルを呼び込むのは無理ならぬことであつたろう。農本主義者の場合、その人種主義と「封建社会」を望ましいとまで言い切る反近代主義が、啓蒙の真逆、つまり反近代主義のナチスと同じと取られる。農本主義者は芸術において

はモダニズム礼賛であり、またみずからを反ファシズムの立場に置く発言をしたが、しかしこのことは注目されず、彼らの先祖返りの南部礼賛がファシストの愛国主義と同一視されていたのである。三六年に出した『誰がアメリカを所有するのか』も、テイトとともに編集にまわった英国在住のアメリカ人ハーバート・エイガーや執筆に加わった英国のヒレア・ペロックがファシズムとの近接性を指摘され、またテイトやウォレンも反中央集権として地方主義を出したために、みずからの意図とは裏腹に、ファシズム疑惑を払拭するどころかその逆になつてしまう(Brinkmeyer 45-47)。

政治の議論をすればするほどファシストになる。この時、彼らは農本主義を唱えた際の「文化」、そもそもフュージティヴ詩人のころから後押ししていた「モダニズム」詩批評を前面に押し出していくことになる。媒体もブルックスとウォレンが三〇年代以降編集に携わった『サザン・レビュー』、三九年以降はランサムが主幹として立ちあげた『ケニヨン・レビュー』、あるいは四四年にテイトが編集をつとめた『スワニー・レビュー』へと場を移し、すでに練り上げていた新批評の枠をつかって「詩」を政治から引き離して自律性を持つものとしたが、そのことが逆説的に、彼らが「人種、ネイション、階級」を「語らない」「普遍の真実、価値」を、すなわち「文化」を語る主

流の語りへと合流することを可能にしていくな。

わけでもそうしたあらたな立場を決定的に印象づけ、モダニズムを語ることがむしろ反ファシズムとして機能して彼らを主流言説へと引き込むことになる事件が一九四一年の「マクリーシュ・ブルックス・テーゼ」論争であった。一九四〇年のパリ陥落は西洋文明の中心地の陥落と理解されたために、アメリカが孤立主義を棄て、国際主義という名の介入をおこなう契機となったのだが、この流れをつくった立役者のひとりが詩人のアーチボルド・マクリーシュであった (Gulbaut 49-54)。彼は一九四〇年『ネイション』誌に「無責任な者たち (The Irresponsible)」というエッセイを発表し、知識人やアーティストが「超然とした (indifferent)」（620）態度で「客観性、超然、冷静さ (objectivity, detachment, dispassion)」（622）を寿ぐ態度を取り、反ファシズムの戦いに参画しないことを批判した。ここでマクリーシュは戦意高揚文学に向かわないことをして無責任と呼んでいるのだが、この無責任さは、同時代の批評家が一九二〇年代のモダニズム文学ばかりを批評することに向けられている。マクリーシュにとっての戦意高揚文学とは「価値、意義、結果 (value, significance, consequence)」（622）を伴うべきものであり、文学を戦争に直結させて武器として動員しようとする。それこそが彼にとっての責任ある態度だったから

である。それに対して、すでに三六年のモスクワ裁判、三九年の独ソ不可侵条約を経ての共産党への幻滅から、すでに党との絆を断ち切った文化左翼としてハイカルチャー評論の路線に振っていた『パーティザン・レビュー』は、四二年に「マクリーシュ・ブルックス・テーゼについて」と題した反マクリーシュの特集を組んだ。ここで注目すべきは、テイトやランサムら南部保守派と、共産主義と手を切ってリベラル路線を取ったライオネル・トリリングラ左翼知識人が同じ場で発言しているという事態である。ここにおいて左翼知識人のある層は政治と手を切る文化左翼であることを明瞭にし、またテイトやランサムら元農本主義者も政治と手を切った文学者として、左翼と右翼が中道に集うのである。トマス・ヒル・ショープは、左翼陣営が左翼政治と決別して文化左翼になる言説上の身振りを「リベラル・ナラティヴ」と呼んでいるが (324)、同じことが農本主義者にも言えるだろう。これは南部農本主義者のリベラル・ナラティヴである。

テイトはこの特集に寄せた文章で、マクリーシュの言うナショナルスティックな「戦時」への協力こそ「全体主義」と呼び、民主主義を守るとは政治メッセージを発することではなく、むしろ自由な想像力を守ることであると述べ、ここに至って農本主義の政治を払拭しつつ、しかし農本主義が守ろうとした文学

の価値だけを前面に出していく(38)。同時にまたそうした姿勢こそが全体主義に抵抗する姿であるとして、逆にマクリーシュ的な動員要請に対して、そのような文学は「ゲッペルス」とバラレルではないかとして(38)、全体主義のレッテルをマクリーシュの側にレトリカルに投げ返している。しかもこのロジックは、前号で左翼のドウワイト・マクドナルドが使ったものである。さらにテイトは、マクリーシュの発想がゲッペルスの「モダニズム攻撃」(38)とバラレルであると主張することによって、ハイモダニズムの評価をも民主主義の側へと奪還した。こうなると、テイトにとっては「詩は詩であるかぎり反枢軸である。たんに行動を呼びかける詩は、その行動がどれほどに切実に必要とされているものであれ、親枢軸」(“Anti-Axis” 643)となる。四一年にランサムが著書『新批評』のなかで詩の複雑さをこそデモクラシーと同一視していたこともこれと同様である(328)。また、すでにクレアンス・ブルックスと共著で『詩の理解』(1939)を出しているウォレンもまた応答した。詩とは「抵抗やテンション」をあらゆるレベルで含むものであり、エリオットらの詩の複雑さは、排除の論理を働かせて「純然たる」メッセージのみを語るものとは対極であるとしつつ、マクリーシュが「無責任」と排除した二〇年代の文学の複雑さを格上げした(“Pure and Impure” 250)。

左翼から反共へとリベラル化した批評家と右翼からリベラル化した農本主義者がまさしく左でもなく、右でもない中道で出会ったという意味で、この一連の論争は決定的だったのではないだろうか。コミュニズムとファシズムという全体主義から民主主義と自由を守ることは、すなわち政治に関わらないことであり、したがって文学はメッセージをピュアに発するのではなく複雑さとテンションを備えたものであること、しかもそれらを実現しているのは二〇年代のモダニスト作品であるということが、むしろ同時代のメッセージ性をはらんだ社会的リアリズムの作品を切り捨てながら主張される。複雑さやテンションを旨とする新批評の言葉、および二〇年代ハイモダニズムへの評価はここへきてむしろ民主主義を擁護するもの、ファシズムに対抗しうるものへと反転し、元農本主義者の新批評家はもはや反動的な非アメリカ人ではない、本流のアメリカ文化を担う立場を手に入れたのである。

*本稿は二〇一〇年五月三〇日神戸大学にて開催された、日本英文学会全国大会特別シンポジウム「知識人の作法」にて発表した原稿「南部農本主義者のリベラルナラティヴ」の一部を加筆修正したものである。

- Agar, Herbert, and Allen Tate. *Who Owns America?: A New Declaration of Independence*. 1936. Wilmington: ISI Books, 1999.
- Borano, Roberto. *Nazi Literature in the Americas*. NY: New Directions, 2009.
- Brinkmeyer, Jr., Robert H. *The Fourth Ghost: White Southern Writers and European Fascism, 1930-1950*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2009.
- Carlton, David L., and Peter A. Coclanis eds. *Confronting Southern Poverty in the Great Depression: The Report on Economic Conditions of the South with Related Documents*. NY.: Bedford Books of St.Martin's P, 1996.
- Dorman, Robert L. *Revolt of the Provinces: The Regionalist Movement in America, 1920-1945*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1993.
- Editors' Note to "The Sunny Side of Fascism." *New Republic*. 10 June 1936. 132.
- "Foreword." *The Fugitive* 1: 1 (1922): 2.
- Gray, Richard. *Writing the South: Ideas of an American Region*. New York: Cambridge UP, 1986.
- Grill, Johnpeter Horst and Robert L. Jenkins. "The Nazis and the American South in the 1930s: A Mirror Image?" *The Journal of Southern History*, November 1992, 667-693.
- Gulbaut, Serge. *How New York Stole the Idea of* *Modern Art: Abstract Expressionism, Freedom, and the Cold War*. Trans. Arthur Goldhammer. Chicago: University of Chicago Press, 1983.
- Hale, Grace Elizabeth. *Making Whiteness: The Culture of Segregation in the South, 1890-1940*. New York: Vintage, 1998.
- Hazlitt, Henry. "So Did King Canute." *Nation* 132 (14 Jan. 1931): 48-49.
- Hobson, Fred. *Tell about the South: the Southern Rage to Explain*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1983.
- Jameson, Fredrick. *A Singular Modernity: Essay on the Ontology of the Present*. New York: Verso, 2002.
- Lumpkin, Grace. "Fascism and Southern Agrarians." *The New Republic*, May 27, 1936: 75-76.
- Macleish, Archibald. "The Irresponsibles." *Nation*, May 18, 1940: 618-623.
- Mead, Margaret. *And Keep Your Powder Dry: An Anthropologist Looks at America*. New York: William Morrow and Company, 1942.
- Menken, H.L. "The Sahara of the Bozart." *The Literature of the American South*. Eds. William L. Andrews, et. al. NY: W.W. Norton & Company, 1998. 368-378.
- Murphy, Paul. *The Rebuke of History: The Southern Agrarians and American Conservative Thought*. Chapel Hill: U of North Carolina Press, 2001.
- Ransom, John Crowe. "Mixed Modes." *The Fugitive* IV: 1 (1925): 28-29.
- . "Introduction." *Twelve Southerners. I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1977. xxxvii-xlviii.
- . "Reconstructed But Ungenerated." *Twelve Southerners. I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1977. 1-27.
- . "On the Brooks-Macleish Thesis." *Portisan Review*. Jan-Feb. 1942: 40-41.
- . *The New Criticism*. Norfolk, Conn.: New Directions, 1941.
- Schaub, Thomas Hill. *American Fiction in the Cold War*. Madison: University of Wisconsin Press, 1991.
- Singal, Daniel. *The War Within: From Victorian to Modernist Thought in the South, 1919-1945*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1982.
- Smith, Sean. "Letter." *London Review of Books*, 23: 11, 7 June 2001.
- Sollers, Werner. *Ethnic Modernism*. Cambridge: Harvard UP, 2008.
- Szalay, Michael. *New Deal Modernism: American Literature and the Invention of the Welfare*

State. Durham: Duke UP, 2000.

Tate, Allen. *Jefferson Davis: His Rise and Fall*. N.Y.: Minton, Balch, Company, 1929.

———. "Remarks on the Southern Religion." Twelve Southerners. *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1977. 155-175.

———. "The Professon of Letters in the South." *Virginia Quarterly Review* 11: 2 (1935): 161-176.

———. "Three Types of Poetry." 1935. *Essays of Four Decades*. Wilmington: ISI Books, 1999.

———. "Anti-Axis Poetry." *New Republic* Nov.16, 1942, 643.

———. "On the Brooks-Maclaish Thesis." *Parti-*

san Review Jan-Feb.1942: 38-39.

———. "The New Provincialism." *The Virginia Quarterly Review* 21: 2 (1945): 262-272.

Tindall, George B. "The Benighted South: Origins of a Modern Image." *Virginia Quarterly Review*, xl (1964): 280-294.

Twelve Southerners. *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. 1930. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1977.

Underwood, Thomas A. *Allen Tate: Orphan of the South*. Princeton: Princeton UP, 2000.

Von Eschen, Penny M. *Race against Empire: Black Americans and Anticolonialism, 1937-1957*. Ithaca: Cornell UP, 1997.

Robert Penn Warren. *John Brown: The Making of a Martyr*. 1929. Chicago: J.S. Sanders and Co.,

2002.

———. "The Briar Patch." Twelve Southerners. *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. 1930. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1977. 246-264.

———. "Literature as a Symptom." Herbert Agar and Allen Tate eds. *Who Owns America?: A New Declaration of Independence*. 1936. Wilmington: ISI Books, 1999. 343-362.

———. "Pure and Impure Poetry." *Kenyon Review*, Spring, 1943. 228-254.

———. *The Legacy of the Civil War*. 1961. Lincoln: U of Nebraska P, 1986.

ハート・レー・マナー 石井洋二郎監『トマス・アン・タートン』藤原書店 一九九〇。